

吉野川 橋ものがたり 第3回 大川橋

上流から橋を望む。
左が山城町下川集落



かつて賃取り橋として
兩岸を結んだ大川橋。
惜しまれつつ
歴史に幕を閉じました

JR土讃線・祖谷口駅近くに、吉野川を渡る吊橋が架けられていました。その名は大川橋。全長150m、幅3m、かつて通行料が必要な「賃取り橋」として三好市山城町下川と池田町大利を結んでいました。



賃取り橋の物語
令和2年1月刊

昭和3年(1928)

頃、土讃線の延長工事(三繩駅〜高都県豊永駅)が行われており、山城谷村や三繩村大利、川崎など祖谷口付近の集落の住民が駅の新設を陳情。鉄道省は「吉野川に橋を架けること」を条件に、祖谷口駅の新設を認めました。そこで、地元で山林王と呼ばれた実業家・赤川庄八氏が私財5万8千円、現在の価格にして一億円以上を投じて橋の建設に乗り出しました。昭和8年(1933)に着工し、2年の歳月を経て、土讃線



昭和10年(1935)11月28日の竣工開通式のもよう。赤川庄八・ヨネ夫妻の渡り初めに続き、獅子舞や阿波おどりなど盛大な祝賀式が行われました
(「賃取り橋の物語」より)



大川橋の少し上流に架かる赤川橋も赤川氏が建設。橋のためとに鎮徳碑が立てられています

開通13日前の昭和10年(1935)11月15日に完成しました。開通当時は大人2銭、小人1銭、自動車20銭等の通行料を支払う「賃取り橋」で、昭和37年(1962)に池田町に寄附され、無料になりました。
通勤・通学はもとより住民の生活に欠かせない「道路」として親しまれてきましたが、老朽化に伴い、平成30年(2018)9月に全面通行止めになり、令和3年2月、ついに吊橋部分が撤去されました。



編纂を行った大岩義雄さん

大川橋の歴史を後世に伝えようと、三好市は記念冊子『賃取り橋の物語』を制作。大川橋のためとで生まれ育ち、三好市文化財保護審議会委員も務める大岩義雄さんが編集を担当しました。「橋のおかげで産業が栄え、文化が進んだ。地域に親しまれた大川橋のことを知ってほしい」と編集にも力が入りました。冊子には載せられなかったけれど、「下川と大利の子どもたちが、橋をはさんで石を投げ合ってたけなかり(笑)、遊び場でもあった」と思い出を語ってくれました。
人々の記憶に深く刻まれた大川橋。三好市は動画配信サイトで記念映像『賃取り橋の軌跡〜大川橋83年のあゆみ〜』を公開しています。在りし日の姿をご覧ください。

行って
きました!!

三大河川シンポジウム2020 利根川で開催



平成24年に兄弟縁組を締結して以来、日本三大暴れ川の仲間達は互いに交流を深めてきました。吉野川流域ではこれまで5回のシンポジウムを開催してきましたが、本年度より持ち回りになり、まずは長男・利根川へ！ 令和2年11月19日・20日、草津音楽の森国際コンサートホールで「いのちを守るための水防災を考える in 草津〜日本一の利根川流域の水防災意識社会の再構築〜」と題してシンポジウムが開催されました。吉野川からは17名が参加。コロナ禍のなかでしたが、しっかりと感染症防止対策を講じての開催で、まずは兄弟達と一年ぶりに再会できたことを喜びました。

シンポジウムでは、近年の気象の変化や災害状況などの講演に続き、三河川の代表が水防災における取り組みを発表。吉野川交流推進会議からは「認定NPO法人 新町川を守る会」の田村 猛さんが、吉野川における洪水の歴史と備え、防災力の向上についての会員の取り組みを発表しました。

翌日は、八ッ場ダムの現地見学会に参加。ダム湖や下流の放流口の見晴らしを楽しんだ後、話題の水陸両用バスによる「YAMBAダックツアー」に出発！ 大自然に囲まれたダム周辺の水陸を約70分かけて遊覧しました。

バスに乗ったまま湖へ。人気のYAMBAダックツアー



利根川の支流・吾妻川流域に建設された八ッ場ダム。令和2年3月に完成しました